

## 令和7年度 第2回栃木市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和8年1月29日（木） 午前10時00分～午前11時15分
2. 場 所 栃木市役所 4階 議会全員協議会室
3. 出席者  
(構成員) 大川秀子 市長、青木千津子 教育長、後藤正人 教育長職務代理者、西脇はるみ 委員、大塚裕子 委員、舘野知美 委員、岩崎好宏 委員  
(事務局) 癸生川 総合政策部長、五十畑 教育次長、潮田 総合政策課長、飯島 教育総務課長、堀江 学校教育課長、宮堀 グローバル教育推進室長、その他担当職員

### 4. 内 容

#### 1 開 会

#### 2 あいさつ

##### ○大川市長

令和7年度第2回の栃木市総合教育会議となります。皆様には大変お忙しい中ご参加いただきありがとうございます。

昨日、全国市長会の社会文教委員会の理事会、評議員会に参加し、令和8年度に向けた教育政策の動きについて勉強させていただきました。その中でも、学校の問題は、学校だけでは解決できない、教員、教師以外が積極的に参画すべき業務、学校以外が担うべき業務、教員の業務ではあるが負担軽減を促進すべき業務というものがあるとされていた。教員が子どもたちの教育のために専念できる環境づくりを今後いかに作っていくかが非常に重要である。先日、エキスパート教職員の表彰があり、来賓として出席したが、その式の中で、エキスパートとして頑張っている先生方がおり、やりがいを持つ教師は貴重な存在であることをお話しさせていただきました。やりがいを持って子どもたちの教育に当たる先生は貴重な存在であり、教員全員がやりがいを持てる環境をつくるのが重要と感じた。

高い意思、使命感を持って教員となっているはずなのだが、昨今の教育現場を目の当たりにしてやりがいを持ってなくなっていることから、教員の使命感を達成できるように周りが環境をつくらなければならないと考えている。

皆様でサポートし、教員を持続してもらうための知恵をお貸しいただきたい。

本日の協議事項は「グローバル教育について」と「とちぎ市男女共同参画プラン年次報告書について」ということとなります。ぜひ慎重なるご審議をいただきたい。

#### 3 協議・調整事項

##### (1) グローバル教育について

○事務局：学校教育課 グローバル教育推進室（資料により説明）

○大川市長

皆様からのご意見・ご質問を伺いたいと思う。

○大塚委員

今年から教育委員がグローバルデーに参加することとなり、時間のある限りいろいろな学校に参加させていただきました。私自身の心の声として、とにかく楽しく、素敵で、素晴らしいものであった。先ほどの説明にもあったように、業務委託をせず、

栃木市が直接雇用していることで、ALT一人ひとりがプライドを持って栃木市の子どもたちに学ばせたい、楽しんでもらいたいということがとても伝わってきた。ALTの方々が全力で常に子どもたちと接している姿を見て、私も楽しい気持ちになり、子どもたちも朝の顔と終わりの顔が全く違っていた。栃木市ならではの姿もあるが、様々な方たちが子どもたちを喜ばせたいという思いで一生懸命プランを練ったということが伝わってきた。本当に栃木市の子どもたちは幸せだと感じる。そういった経験ができた子どもたちは、大人になっても心に残るものである。私の生徒がグローバルデーに参加しているということで、感想を聞いてみると、本当に楽しい時間であったということを書いてくれた。この取組について、市からもどんどん発信していただきたい。取組の様子をビデオで撮影して、市役所内で放映していただきたいと思えるくらい濃密な時間であった。

#### ○大川市長

見ている側も楽しかったということは大切だと思う。終わってから子どもたちが楽しかった、良かったと思うのと同時に、始まる前から楽しみだ、いっぱいしゃべりたいと思って始まることも素晴らしい。苦手であれば、最初は不安に思うものであるが、子どもたちが初めから楽しみだと思っていることは重要だと思う。

#### ○西脇委員

学校訪問時にグローバルデーを見学したが、私が子どもの頃は外国の方が近くにおらず、この取組は大変興味深かった。私自身も英語が好きで、ALTの方に「栃木市の子どもたちはどうですか」と聞いたら、「みんな良い子だ」とおっしゃっていた。先生方も楽しそうであり、小さい頃の英語は単語ばかりと思うが、直接外国の方と話せる経験は大変貴重なものであり、幸せだと思う。

#### ○大川市長

直接外国の方と話せるということが素晴らしい。話せる力はあっても、実際に直接外国の方と会話をするのは勇気がいるものであり、自然に話すことができるようになるのは最高のグローバル教育であると思っている。

#### ○館野委員

子どもたちがグローバルデーに臨む時の楽しみであったり、もっと話したいと思える取組の裏側には、学校の担任の先生や受け入れる側として楽しいことが待っているよという訴えがあったからこそ、子どもたちの心が整って、受け入れられているのではないかと思う。それが終わった後の子どもたちの意見の中で、外国の文化に触れてもっと知りたくなった、行ってみたくなくなったという意見があり、日本の良さを知るのと同時に、外国に行ってみたくなくなるという気持ちの動きこそが、グローバル教育の狙いなのではないかと考えている。それが子どもたちに伝わっているということも素敵な取組である。欲を言えば、一回だけでなくより多くの機会があると良い。栃木市は学校数が多いため、満遍なくということは難しいと思うが、機会を増やしていただきたい。

#### ○岩崎委員

コミュニケーションを取っていくと、他国が知れて良いと思う。年を重ねるにつれ、外国の話を知ると、自分たちの日本、あるいは栃木市の文化や歴史を伝えたいと思っても、意外と知らなかったということで大人になって後悔することが多い。子どもたちには、グローバル教育に並行して栃木市の魅力や自分の町にはこんな良いところがあると伝えられるような教育もできたら良い。それには地域の方にも学校に来ていただいて、協力して一緒にやっていくことでより良いものになっていくのではないかと考えている。

#### ○大川市長

外国のことを知ると同時に、自分の国のことも知るということは重要である。日本人は自分の国の自慢ができないとよく言われる。日本の良さを知って自慢できるくらいの子どもたちが、世界でコミュニケーションできるようになると良いと思う。

#### ○後藤委員

国際理解も大事だが、自分の地域、国の良さを改めて理解するという意味では、グローバルとローカルでグローバルという考え方が大切である。平成29年に小学校に英語が教科として認められ、市内にも他国からいらして生活している方々もいる。私が自治会の当番の時に、ごみの分別について質問に来たことがある。家庭ごみをどういう風に分別すればよいかわからない、どこに置けばよいのかわからないということであった。その時に様々な会話があり、学校教育におけるグローバル教育も大切であるが、地域におけるグローバル教育の意識を広げていくことも大切だと感じた。グローバルについて、学生に聞くと、「英語の点数を上げる、英語で話せる事が増える」ということを真っ先に挙げてくるが、それよりも自分の考えを臆せず話すことができ、かつ協力できるということを大切にしなければならないと思う。本市において、コミュニケーション能力を軸にしたグローバル教育を推進しているということで、大変共感している。世界中のどの国の方に対しても自分の思いを伝えることができる、相手の国の文化を尊重できると同時に日本の国の良さも伝えられるということが、本市における未来のグローバル教育につながっていくのではないかと思う。今後共生社会となることは確実であると言われていたため、本市において、幼稚園・保育園・小・中・高等学校で実践を交えて教育するということが大事な取組であると思う。

#### ○大川市長

様々な取組を行っていただき、結果的に英語が好きだという子どもたちの割合が全国平均を上回っているところである。現在本市にはALTが22名おり、まだまだ増やしたいところであるが、限られた予算の中で、そういった教育をしっかりと行っているということに心から感謝申し上げたい。私の公約にもある通り、しっかりと実践していただいている青木教育長をはじめ、関係者には感謝申し上げます。

#### ○青木教育長

皆さんから良いお話を聞くことができ、これまでの活動をやってきてよかったと感じる。22名のALTの方に対して、私は、トレジャー、栃木市の宝であるといつもあいさつの中で言わせていただくのだが、本当に宝と言い切れるほどのハート

がある。ALTの方の母国はそれぞれで10か国であるが、国際社会においては、最大公約数の中で通じ合える英語で良いのではないかと思っている。なによりこの22名のALTの良いところは、子どもたちに軸足を置き、心から愛して、大切に育むように英語で対応していただいているハートが温かいところにある。英語教育は、特に低学年にとって流暢に話せるようになるということよりも、全人教育であると思っているので、心理的安全性を担保し、間違いを恐れず、たくさんの人と英語で会話ができるように、栃木市の外国語教育をこれからも推進できればと思う。

## (2) とちぎ市男女共同参画プラン年次報告書について

○事務局：人権・男女共同参画課（資料により説明）

○大川市長

皆様からのご意見・ご質問を伺いたいと思う。教育委員会は57.1%ということで大変優秀だと思われるが、いかがか。

○後藤委員

意識の固定化が問題となっていると思う。例えば、性別における偏見や固定的な男はこうあるべき、女はこうあるべきというような役割分担というような視点がある。2～3年前に実際に現場で見た場面で、幼稚園の子どもたちが遊びでおままごとごっこをしていた。私たちの時代は、大抵男の子が帰ってきて、女の子が「お帰りなさい。お風呂にしますか、食事にしますか。」といった性別で決まった役割を演じていたものだが、その幼稚園ではお父さん役の男の子が「ママお帰り」といい、母役の女の子をねぎらう形のやり方であった。あるグループはお医者さんごっこをしていて、昔は男の子が医師役で、女の子が患者役であった。その幼稚園の活動では女医さんであったりと様々なパターンがあった。今、病院でもかなり女医さんが増えてきて、子どもたち意識の中では普通の景色となってきている。お医者さんごっこだけでなく電車ごっこでも大抵運転手が男の子だったりした。そういう身近な中に固定的な考えがあったが、今の幼児教育の具体的な遊びの場面を見ると、社会の変化を如実に表していて、子どもは非常に順応して遊びに生かしている。そういった意味で小さいころから意識を変えていくという本市の取組はとても重要であると思う。個人的な意見であるが、究極的に言えば、栃木市の男女共同参画プランの一番根底にあるのは、学校教育課でも常々言っている山本有三先生の人権尊重、生命尊重に繋がっているのではないかと思う。大人の意識を変える、雰囲気を変えていくということは簡単なようでとても難しい。むしろ子どもたちから学んでいく事が非常に多いと感じたところである。

○館野委員

数年前のCMで、「私はパイロットになります」という言葉や赤ちゃんが泣いているときに「待ってね」という言葉を男性が言っている言葉なのか、女性が言っている言葉なのかを考えさせられるCMがあった。自分の意識の中でも固定観念はなかなか消えないし、変えづらい部分があるなど感じたところである。男女の差別なくという風に言っているものの、男女の人権となったときに、ちょっとした違和感を感じて普通の人権で良いのではないかと考えたり、男女の性と書いたときに、やはり男女の性なのかと感じてもやもやがあったりする。性の問題なのか人権の問題なのかと考えてしまう自分がいる。一番大切なことは、やはり自分を大切にすること

や自分自身の気持ち、体、思いを大切にできるからこそ、周りにも優しくできるのではないかと思う。資料の最後のページの「審議会の男女比」においても、単に男女比と見るよりは、人それぞれの得意不得意などもあり、数字で見切れない部分もたくさんあると思う。そこに少しでも様々な視点を入れるという意味合いも込めて、女性の意見が反映できるような審議会の在り方がすごく素敵だと感じた。そういった取組を市でもしていただけているのだなということが伝わってきて、とても前向きに聞かせていただいた。

#### ○大川市長

世界のジェンダーギャップを比較すると、健康と教育は上位だが、政治経済のランクが低い。私も男女共同参画、男女平等を勉強してきたところであるが、男女共同参画社会という言葉があえて必要なくなる社会となればいいと思っている。審議会においても、得意不得意はあると思われるので、自分に合ったそれぞれが得意な分野で力を発揮できるそういう社会となれば、あえて男女共同参画と言わなくて済むと思う。日本もそんな社会に着実に進んできてはいるが、テンポが遅いのは、固定観念が昔から自然と出来上がってしまっていることが理由の一つであると思っている。その固定観念が外されて無くなった今の教育を受けた子どもたちが、自由に自分の持つ力を発揮でき、相手を尊重できる社会になってくれれば良いと思う。以前と比べると、社会の中で女性の活躍できる場は広がってきている。学校教育の中でも男女関係なく同じ教育を受けて、お互いに十分に力を発揮していると思う。しかし、社会に出た時のギャップがやはり大きい。そこで女性が自信を無くしてしまうことを防ぐため、社会に出たときにきちんと能力を十分発揮できる社会にしなくてはならない。市でも働く環境を整えることを一生懸命始めているところである。出産は女性しかできないものであるが、それ以外の部分で男性がいかに協力していけるか、子育ても家事も一緒に負担して、安心して子育てができるような環境となれば、2人目、3人目と育てられると思う。そうもしないと少子化がどんどん進行していつてしまうため、少しずつでも着実に働く場の環境づくりも進めていきたいと思っている。

#### ○岩崎委員

固定的な性別役割分担の解消は難しいと思っていたが、資料の中では予想よりもA評価やB評価が多かった。ただ、男女共同参画社会を目指すというよりも全員参加型社会、私も含め、高齢者も、障がいを持つ方も、外国人の方も活躍できる栃木市を目指して行ければ良いと思う。人権尊重の観点で男女共同参画がある一方で、人口減少が進んでおり、社会を維持していくために全員が参加しないといけないという視点からも、栃木市が子育てしやすい街というだけでなく、働きやすい、働き甲斐のある企業があるという両方がないとなかなか都市間競争で勝てなくなってしまい、栃木市の良さが発揮できなくなってしまうのではないかと心配している。栃木市版ワークライフバランスとして、単純に残業を減らした、働き方改革をしたということではなく、20代はキャリアを積んでいく女性がたくさんいて、30代では子育てを中心に暮らすワークライフマネジメントができる社会のような、仕事か家庭かのどちらかを選ぶのではなく、家庭での経験が仕事に生かせるとか、仕事の達成感がプライベートの充実にも繋がるような相乗効果を得られるような社会を目指していく方が、栃木市の独自感が出るのではないかと考えている。

○後藤委員

昨日、奨学生の選考委員会を行ったが、その中で、若者の定住促進ということで、5年間栃木市に居住すれば、返済は免除する「住みいる奨学金」という制度がある。栃木市は住みやすい、働き場もあるという、若者の将来を見据えた奨学金制度を設置しており、昨年度より申請者が増加している。現実と制度のギャップは、どこでもついて回るので、制度を定めている以上は、制度に近づけるような現実に変えていくという取組が非常に大切である。そうすることにより、若い方が首都圏に流れずに、栃木市の自然と人間に憧れて住んでいく、そういった姿はこれからの栃木市でも十分起こりえる可能性があるかと、奨学金の選考委員会に参加するたびに感じている。

○大川市長

社会の変化に制度を合わせていくことも重要かと思う。

4 その他

- ・次回開催は令和8年6月 会議室は調整中。

5. 閉会（11：15）